

## 近代アメリカの光と影：西部開拓史

阿子島 香

### [東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

#### Part2：モノが語る人類誌]⑤

2025 年 8 月 23 日

##### 講座要旨

今年度の館長講座は、「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡る旅をしています。考古学と歴史の分野を中心に、海外のミュージアムを訪ねて、世界史の流れを東北地方と関連させて考えています。今後の内容は、次のように予定しています。⑥世界民族誌と東北旧石器人の文化適応、⑦世界民族誌と東北縄文社会の復元、⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ。これまでに私が調査研究を行なってきた地域の博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れていきます。またお話の内容では、時々、旧シリーズ「東北グローバル考古学」の、全 24 回の内容と関連させつつ、参照しています。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要を公開しております（多くは「読む館長講座」として、改めてエッセイとして再構成したものになっています）。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

世界史の流れといっても漠然と感じられるかもしれません。もっと具体的には、連続講座 8 回の通年テーマとして「時代区分」の意味を考えています。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っていきましょう。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出たいと思っています。

今回は、時代区分「近代」を取り上げます。前回に取り上げた「中世」から、「近世」を経るの転換を探ります。日本やヨーロッパでは、中世封建制の社会から近代資本主義社会に至る間に、幕藩体制あるいは絶対王政の枠組みの中で、資本主義経済および近代国民国家への土台が形成されました。当館の春季特別展「QuizKnock と巡る江戸東京博物館展」をご覧になった方におかれては、江戸時代の社会と経済が、実は近代化を準備した成熟したものであったことを実感されたのではないのでしょうか。ヨーロッパでは中世以降の王権の伸長と宮廷文化、そして重商主義などの背景の中で、資本の原始的蓄積が進み、各国それぞれの近代に至る過程が進んだと一般的に捉えられます。しかし世界史の発展段階とされる過程に

は、多くの多様性がある、なかなか統一的に理論化するには至っていません。原始時代、古代、中世の回の講座でも、世界の多様性を考えてきました。それだけ、人類の歴史には、多くの別々の道筋があったということでしょう。なぜ日本とヨーロッパが類似する展開を示したのか、またどのような相違点があるのかは、世界史全体にとっても重要な論題だと思います。

今回講座では、アメリカという世界史上独特な地域に焦点をあて、特に西部開拓の時代を考えてみたいと思います。超大国アメリカの始まりは、移民たちが築いた植民地でした。いわば「近世」を飛び越して、近代の社会・経済・理念が移植されて、1776年の独立13州から、すさまじい世界歴史の推進力（近代資本主義の圧力）が働いて、内部の成長（北部の産業大国、南部の農業大国）、外部への拡大（西部開拓）が起きました。「近代」化ということの本質を考えるに際し、北部、南部、西部はそれぞれに示唆的な別の軌跡を辿りました。

今回探訪する遺産、博物館は、西部開拓時代の多くの地域史跡と歴史を概観する場所です。館長撮影の多くのスライドを見ながら、「モノが語る人類誌」を考えたいと思います。「西部開拓博物館」(Museum of Westward Expansion)、「ミズーリ歴史博物館」(Missouri History Museum)は、中西部の大都市セントルイスにあります。一連の写真は2010年度アメリカ考古学会開催時の撮影です。セントルイスはミシシッピ川とミズーリ川との合流点付近で水運の拠点でもあり、古くから大西部へ向かう根拠地となっていました。この都市のランドマークとして、「ゲートウェイ・アーチ」があります。高さ192mの巨大なアーチ形建造物は1960年代に作られて、「西部への門」を象徴します。ジェファースン大統領記念公園にあって、その地下が博物館になっています。19世紀を中心に西部の歴史を概観します。年代別・地域別・テーマ別の視点が巧みに組み合わせてある展示です。広大なルイジアナ地方を、1803年にアメリカがフランスから購入した事件は、大西部開拓の起点とされます。西部の探検に、ルイスとクラーク隊が派遣されて、多くの知見をもたらしました。合衆国は先住民インディアン諸族の「国々」と多くの条約を結びつつ、西部に拡大していきました。条約は次々に破られました。歴史を追いながら、代表的な探検隊、大平原やロッキー山脈での「マウンテンマン」たち、ビーバー毛皮交易の推移、大河の水運を通じた交通運輸、牧畜産業から開拓農民へ、オレゴン街道と幌馬車隊、騎兵隊とFort(砦)、駅馬車と大陸横断鉄道、ゴールドラッシュとインディアン支配、などを取り上げています。講座では実物資料、またジオラマやパネルを紹介しつつ、西部開拓史を辿りたいと思います。

ミズーリ歴史博物館は、セントルイス市内にある総合博物館で、地域の「モノ資料」から大きな歴史の流れを概説しています。展示は大きく2章に分かれていて、街の始まりから現代まで、多くのトピックを取り上げています。子供たち向けの展示も充実して、ボランティア活動も盛んなようです。地域史の転機になった事件として、1904年に開催された万国博覧会を詳しく解説しており、この年の前後で2章の展示を分けています。博覧会での「ゲイシャ・ガール」「アイヌ」展示などは、時代性とアメリカ人たちの日本観がうかがえます。太平洋戦争当時のプロパガンダのポスターもあります。ルイジアナ地方の領有から現代ま

で、西部開拓の拠点地としてのセントルイスの歩みを通じて、地方都市に生きた庶民の歴史も感じることができます。「郷土の歴史は、世界史の一部」という、館長がよく言っている考え方を、改めて認識しました。

## トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、项目的に紹介します。

・講座の副題は(フロンティアと地方都市の変貌)としました。近代資本主義社会の一面を、ヨーロッパの近世・近代からの拡大過程とも言える、アメリカ社会の西部開拓史を題材に考えてみます。「時代区分」とは「社会のしくみによって」と言われます。日本史の広く受け入れられてきた時代区分の確認で、原始から現代までの流れを前回まで考えてきました。アメリカでは、王政・貴族階級が無いままに、移民たちが近代を作っていました。いわば近世を飛び越えた世界史です。時代により社会史・経済史の面では、いったい何が、どのように変わったのでしょうか。考え始めると、終わりがありません。問題意識を大切にしましょう。今日で、私の館長講座は通算 37 回目となります。お蔭様で一度も欠けることなく、毎回の別のテーマでのお話を続けることができました。有難うございます。この後も、どうぞよろしくお願い致します。

・では講座のお題です。前回は「中世」という時代を取り上げました。中世フランスは、キリスト教世界の中核でもありました。フランスに残る中世の遺跡や文化遺産を訪ねて、それらの持つ「美」にも着目しました。またヨーロッパの「封建社会」の経済的、社会的な、構造に触れてみました。アヴィニョンにある旧教皇庁の宮殿博物館、美術館、パリのソルボンヌ地域にあるクリュニー修道院の美術館をも訪ねました。今回は、アメリカの西部開拓期からの歴史を見ながら、近代という時代の特徴を探りたいと思います。

歴史博物館グローバル紀行として、二つの地方博物館を訪ねる旅です。博物館展示を通して、フロンティアの現実と、地方都市の発展と変貌を探ります。ミズーリ州のセントルイスにある、「西部開拓博物館」(意識)、「ミズーリ歴史博物館」です。セントルイスは、現在はアメリカ中西部地域の中心都市の一つですが、かつて、大西部開拓の根拠地になった場所でもありました。現在の都市圏人口は、約 280 万人の商工業都市です。大河ミシシッピ川とミズーリ川との合流点付近に位置して、ここを拠点にして、19 世紀の後半には、大量の移民が、幌馬車隊を連ねて、西部に移動しました。そのルートは、オレゴン街道といわれます。

近代アメリカは、世界システムと化した資本主義経済の強大な力が、ヨーロッパの近世社会から抜け出た、世界史上の独特の存在だったと言えます。アメリカ社会の形成と特徴を考えることは、中世、近世、近代という時代区分の特徴を考えることにつながると思います。私は、大西部に都合 6 年ほど暮らした経験があり、考古学のフィールドワークにも出ていました。今回は、博物館の展示物を中心に(多くの写真は館長撮影です)、さあ学び直しの世界の旅に、ご一緒に出掛けましょう。

## 新天地への旅路

・この絵は 1621 年、プリマスでの初めての「感謝祭」を描いたものです（1914 年、ブランズクーム作）。メイフラワー号に乗った 102 名の「ピルグリム・ファーザーズ」の物語は、アメリカ史にとって伝説的な「神話的存在」というべきものでしょう。実は飢餓の瀬戸際にあった移民たちは、インディアンたちに助けられました。現在のマサチューセッツ州に居住していた「ワンパノアグ族」の援助が無ければ、ごく初期の入植者たちは生存がかなわなかったかもしれないとされます。

・プリマスは、現在はマサチューセッツ州のボストン南東の近傍にあります。ハーバード大学が立地するのはケンブリッジです。この一帯は「ニューイングランド」地域と呼ばれる、アメリカでも最古の入植地域でした。なおスペイン人たちはメキシコ湾岸の南方からテキサスやニューメキシコ方面に入りました。現在の州名で、マサチューセッツ州の北にはヴァーモント州、ニューハンプシャー州、南はコネティカット州、ロードアイランド州になります（地図）。17 世紀前半、このニューイングランド地域に居住していた、ネイティブ・アメリカンの諸部族の分布です。最初期の、イギリス系移民の入植地周辺も、先住民たちの世界でした。下は、はるか西方にあるネバダ州の、現在のネイティブ・アメリカン、パイユート族の古写真です。つまり北アメリカ大陸は、全土どこにあっても、たいへん多様な環境に適応していたインディアン諸族が居住していた大陸だったのです。何となく「開拓」という言葉には、新たな土地を切り拓いていくイメージがありますが、北米大陸は最初から全然違っていました。このことは、西部開拓時代を通じての、いわばアメリカの宿命、あるいは「原罪」という歴史でした。

・フロンティアでの理想を目指して進んでいく前には、先人たちがいました。先住民ですね。アメリカ合衆国の独立宣言は、フランス人権宣言に先んじていて、近代社会のあるべき目指す方向を理念的に明記したと歴史的に評価されています。話題は飛びますが、ニューヨークの港で移民たちを出迎えた「自由の女神」像（Statue of Liberty）は、合衆国の建国百年を記念して、フランスの人々から贈られたもので「自由と民主主義」を象徴しています。一方で、アメリカ大陸では、すでに奴隷制度が広範に行われていて、南部諸州になった場所（南北戦争の南軍）は、農業大国への発展の道を歩んでいました。アメリカ映画の名作「風と共に去りぬ」（1939 年、原作 1936 年）を思い出す方は、大農場の生活シーンを回想してください。映画の話のついででは、「壮烈第 7 騎兵隊」「駅馬車」「ジェロニモ」「黄色いリボン」など、西部劇の名作には事欠きません。確かに西部劇映画の世界の人間ドラマは感動的ですが、ちょっと止まって、アメリカインディアンの描き方を、注意深くご覧になってみてください。

## セイラムの魔女裁判

・初期アメリカ社会は、近世絶対王政を経ることなく、移民たちが近代を創っていった歴史

がありました。中世から近代へという「時代区分」のギャップが表出した感があるのが、マサチューセッツで17世紀末にあった魔女裁判の事件でした。セイラムはボストンの北東にある町で、日本では近代考古学を創始したエドワード・S・モースが博物館長だったセイラム・ピーボディ博物館や、日本美術を評価したフェノロサの町として知られています。このセイラム村で、1692年から93年にかけて「魔女裁判」が行われました（Witch Trials）。魔女裁判というとヨーロッパ中世のことと思いますが、初期アメリカ開拓地での事件で、しかも公式の裁判所での審理でした。1689年に女性3人の奇行があつて、魔女の疑いをかけられ、200名近くが告発されて、19名が刑死、5名が獄死したという事件です（スライドで絵画と版画）。

・中世ヨーロッパでは、「魔女狩り」の嵐が吹き荒れました。有名な歴史には、英仏百年戦争のなかで活躍したジャンヌ・ダルクの生涯があります。1412年頃に生まれたジャンヌは、神の啓示を得て、その後1429年に英国からオルレアンを解放する役割を担いましたが、しかし1430年に捕らえられました。宗教裁判（異端審問）で魔女とされ、火刑にされた事件は、非常に有名ですが、史実は解明されていない点も多いということです（歴史的絵画「火刑台のジャンヌ・ダルク」1843）。のちに名誉回復され、フランスでは国民的な英雄になっています。多くの物語、映画などもあります。

・英仏百年戦争というと、私たちは近代国民国家どうしの宣戦布告がある戦争をイメージするかもしれませんが。しかし中世では、近代的な国民国家の「国境」の概念は、存在しませんでした。中世は、諸侯の所領と、王家の支配領域が複雑に錯綜していた時代でした。今でいう国を超えて、王族や貴族の通婚は普通でしたし、知識人たちでも大学という組織でヨーロッパ世界の中を行き来していました。北フランスは、イングランド王の支配地域と、フランス・ブルゴーニュ公の地域とが、交錯していました。当時を描いた絵図では、馬上の騎士とその紋章、長槍部隊、長弓部隊、弩（ど、いしゆみ）で交戦する部隊の姿があります（スライド、クレシーの戦い）。

・アメリカの開拓史では、「封建社会」というものが全くありませんでしたので、今年の講座のメインテーマ「時代区分の本質」を考えるには、非常に示唆的な歴史と思って取り上げております。ワシントン D.C.の郊外に「マウント・ヴァーノン」という国史跡があつて訪ねたことがあります。ここは、合衆国の初代大統領であつたジョージ・ワシントンの旧農場の遺跡で、発掘調査も行われていました。農場の遺構には「奴隷たちの居住区画」もありました。合衆国独立宣言を起草した一人、トマス・ジェファークソン（第3代大統領）のイメージは、近代社会の原理を体現するように感じますが、当時の社会は、変化する時代区分の複合のような構造があります。ちなみにジェファークソンには、西部開拓を進めてインディアン諸族と国家間条約を締結して贈った「平和のメダル」もあります（のちに西部開拓博物館の展示紹介で写真）。

## 大西部へのルート

・オレゴン街道 **Oregon Trail** は、開拓者たちの通った代表的な道でした。西部へ向かう幌馬車隊のルートの基点とされるのは、セントルイスでした。ミシシッピ川とミズーリ川とが合流する土地で、西部開拓の拠点となった場所です。セントルイスから、プレーリー（大草原）を横切って、ミズーリ州、カンザス州、ネブラスカ州、ワイオミング州からロッキー山脈を越える難所に差し掛かり、アイダホ州、そして太平洋岸のオレゴン州へ向かいました（地図でルート解説）。オレゴン街道に今も残る幌馬車のワダチ（轍）の跡、移民たちが自らの名前を記した「レジスター・クリフ」などの史跡が残ります。今回は、この都市の二つの歴史博物館を、詳しく紹介いたします。

・西部への道といえば、現代史では、ルート 66（国道 66 号線）があります。シカゴから、イリノイ州、ミズーリ州（州の境に、セントルイス）、オクラホマ州、テキサス州、ニューメキシコ州、アリゾナ州を経て、カリフォルニア州へ通じていました。アメリカの目覚ましい経済成長を背景に、1920 年代の、自動車の発達がありました。フォード自動車の流れ作業組立ラインが画期となりました。アメリカ文学の巨匠、スタインベックの『怒りの葡萄』（1939）の舞台でもあります。1930 年代に猛威を振るった「砂嵐」時代の、西への労働移住を描きました。

・セントルイスの象徴的なランドマークとして「ゲートウェイ・アーチ」があります。1960 年代に建設され、西部開拓への門戸をシンボリックに表現したものです（写真）。高さ 192m もあり、エレベーターで上に行けます。ミシシッピ川のほとりに立っています。この地下には、西部開拓博物館 **Museum of Westward Expansion** があります。地下に降りていくと、18 世紀～ 19 世紀の世界が広がります。（2010 年、アメリカ考古学会の開催地）。セントルイスは、ミズーリ州で、ミシシッピ川の対岸はイースト・セントルイスで、イリノイ州になります。イリノイ州部分に、古代文化ミシシッピ文化の都市遺跡「カホキア墳丘群」があります（2024 年 館長講座⑦「ネイティブ・アメリカンの世界①」）。

## 西部開拓博物館

・博物館の入り口では、空港なみの、厳しい身体・手荷物検査がありました。大きな中央展示ホールでは、頭上に表示されている、1820、1830、1840 などの年代ごとに、通史的な展示説明と、歴史的な事項テーマの説明に分かれています。10 年ごとの歴史的变化が大きいアメリカ史ならではの構成です。ゲートウェイ・アーチへ登るエレベーターへの行列がありました。左はチケット販売ブースです。博物館は国立で、連邦政府に属する「国立公園局」**National Park Service**（ロゴマーク）が運営しています。「レンジャーがおりますので、御用の際は」のサインが見えます。頭上の編年表示で 1830 年代 などです。各コーナーは展示テーマでまとまっています。開拓時代の水路開発、水運、物資輸送などの部分です。蒸気船（外輪船）は、1880 年代からミシシッピ川に就航しました。大河は『トム・ソーヤーの冒険』（マーク・トゥエイン）などの文学的舞台でした。

## 広大なルイジアナの購入

・モニターによる映像展示です。ケーブルテレビ局大手に、「歴史チャンネル」があります。スミソニアン機構の博物館群でも、この **History Channel** の製作番組を連携して展示に活用していました。この見出しは「値札が 1500 万ドルの、陸地のかたまりの上で」。ルイジアナ地方（図）の購入による、アメリカ合衆国の西方への領土拡大は、その後の西部開拓の発展の引き金になりました。第 3 代大統領のトマス・ジェファークソンが 1803 年に、当時フランス領だったルイジアナを、皇帝ナポレオンから今は信じがたい安値で購入した歴史上の大事件でした。その南は「テキサス」でメキシコ領になりますが、境界も判然としなかったといいます。

・ルイスとクラークの探検隊は、1804 年～1806 年に派遣されました。ジェファークソン大統領はルイス陸軍大尉、クラーク少尉を探検隊に任命しました。この探検はルイジアナの購入後、西部地方への発展拡大の大きな画期になったとの、歴史的な評価が定着しています。こちらはバッファロー、ヘラジカ、ビーバーなどの動物の、西部での生態説明です。

・ルイスとクラークの探検経路です（地図）。この時の詳細な記録は、同時代の一級史料であり、かつその後の西部進出の重要な足がかりになりました（光）。一方で、先住のインディアンの諸部族にとっては、その後の暗い運命を暗示するものでした（影）。

・その後、ルイジアナ地方に対する、メキシコ領テキサスとの境界紛争の一端では、テキサス独立戦争がよく知られています。その一部で 1836 年の「アラモ砦の戦い」（テキサス州サン・アントニオ）では。アメリカ人の国民的英雄となったデヴィ・クロケットが活躍しましたが、戦死しました。183 人（諸説あり）の部隊が、援軍の到着を待ちつつ、全滅したのでした。彼らは 13 日間にわたって、数千人のメキシコ軍と戦い続けました。この事件で、**Remember Alamo !!**（アラモを忘れるな）という言葉ができました。そしてこの言葉は、1941 年の「真珠湾を忘れるな！」に応用されたのです。**Remember Pearl Harbor !!** です。

## バッファローとロングホーン

・バッファロー（アメリカヤギウ）は、開拓時代初期には全米で 6000 万頭が生息していたと推定されています。しかし、平原インディアン諸族の文化を破壊しようとする政策のもと、意図的に過度な乱獲が行われて、19 世紀後半には、ほぼ絶滅してしまいました。その後の保護活動で、復活はしています。国立公園などに。保護区があります（ワイオミング州のイエローストーン国立公園など）。バッファローはプレーンズ・インディアン諸族の、生活の全ての源泉でした。（2024 年館長講座⑦「ネイティブ・アメリカンの世界①」）。

・大平原地域（グレート・プレーンズ）に導入されたウシの品種は、長角牛（ロング・ホーン）、**Texas Longhorn** が代表的なものでした。大西部の平原地帯では、おおむね牧場主が先に、そして自営農民の順序で、開拓者が入っていました。この両者の対立は、西部劇映画の劇中での、代表的なテーマのひとつになっています。たとえば「シェーン」（Shane）、

「荒野の決闘」(My Darling Clementine) などです。広大なテキサスなどでは、後世までも大牧場主が健在で、やがてカウボーイたちの時代を迎えました。「大いなる西部」(The Big Country) があります。現代(20 世紀前半)の大牧場主たちを描いたジェームズ・ディーン最後の主演作、「ジャイアンツ」はこの社会的階層のお話です。

#### 初期の開拓時代

・開拓時代の初期のころ、17～18 世紀には、フリントロック銃が使われていました。火打ち石を撃鉄部分にはめこんで、火花を飛ばして、発火させる方式です(スライド)。19 世紀以降、雷管式銃が広がりました。弾丸の薬莢に、火薬が装填されている方式です。19 世紀後半に、すなわち西部開拓時代の最中に、ライフル銃と、連発式銃が広がりました。ライフル銃は、銃身の内側にらせん状の溝が刻まれているものです。単発銃から連発銃(ウィンチェスター・ライフルが代表的)になりました。日本の博物館に、文化財としてのフリントロック銃がほぼ皆無なのは、ちょうど「鎖国」時代と重なるためでした。すなわち世界史の偶然の産物です。ですから日本史では、火縄銃から、一気に雷管式、また元込め式連発銃へと変わったのでした。滑腔銃身からライフル銃身への順次の段階的変化(マスケット銃から元込めライフル銃への進化)は、日本にはありませんでした。幕末の時代に一気に最新型銃が大量に流入したのでした。ちょうど、アメリカの南北戦争の終結後(1865 年以後の余剰銃器)が、明治維新の争乱時になります。これも世界史の偶然でした。(2024 年館長講座③「さまざまなパリの顔とミュージアム」)。

・大西部への白人たちの進出(=侵入)をうながした大きな要因は、毛皮の交易でした。当初は、インディアン諸族との交易によって、毛皮が入ってきました。カナダなど北方地域が主な相手先の時代でした。「ハドソン湾会社」などがあります。のちに、マウンテンマンと呼ばれる人々が、ロッキー山脈などの奥地に入りました。写真はセントルイスの新聞広告で、「ミズーリ川を遡る若者隊員を百人」募集です。1 年から 3 年契約とあります。19 世紀のアメリカでは、東部でも西部でも、地域新聞は当時の主要なメディアでした。ビーバーの展示ですが、川にダムを作る習性があり(ビーバーダム)。その毛皮は高値で取引されました。

・開拓時代の前は、探検の時代でした。ルイジアナ地方の範囲を示す地図展示です。これは、現在のルイジアナ州とは全く異なります。広大なルイジアナ地方の購入後、すぐに探検隊が入っていきました。代表的な探検隊として、やはりルイスとクラーク隊が有名です(1804～1806)。この探検隊は、あとでご紹介するミズーリ歴史博物館の常設展示でも、大きく取り上げられています。展示物のコンパスやトランシットといった測量機材は、基本的な探検隊装備でした(同型のモノかは不詳)。もちろん地図など無い時代でした。小麦粉、火薬、インディアンとの交易物(ガラス製品や、鉄製品など)を持参していました。ルイスとクラーク隊の規模は約 30 名で、3 年にわたってルイジアナ地方を探検し、太平洋岸まで達して、一時的な拠点を作る使命を帯びていました。ミズーリ川の写真(現在)展示は、デソト・アイオワ州国立野生生物保護区域 Desoto National Wildlife Refuge からです。デソトは、ス



ペイン人の探検家で、英仏の探検家よりも以前の人物です。ニューオーリンズ周辺など、南部各地を探検した事蹟で知られます。クラーク (William Clark) の日誌からの一節で、1804 年 8 月 1 日、動物、植物、地勢、など多岐にわたる記述があり、蚊の大群に襲われたと記しました。

### 先住民の生活と騎兵隊

- ・平原インディアンの生活様式の展示です。円錐形の「ティピ」と呼ばれるテントの家に住んでいました。バッファローの群れに対応して、大平原を移動する生活を送っていました。バッファローと共生する生活様式については、2024 年館長講座⑧「ネイティブ・アメリカンの世界②」で解説しました。(読む館長講座も、HP からご利用になれます)。

- ・第 7 騎兵隊のカスター部隊長です。1876 年 6 月に、スー族とシャイアン族を主とするインディアン集結を制圧しようとして、逆に敗れて戦死しました。第 7 騎兵隊全滅の報は、全米に衝撃を与えて、対インディアン政策を激化させました。その後ウーンデッド・ニーでの虐殺事件 (1890) も起きています (サウスダコタ州)。

- ・騎兵隊の砦の実物大模型展示です。立て掛けてある銃は陸軍の制式銃。大西部では騎馬の技術が、非常に重要だったことは、映画でもよく分かります。騎兵隊のブーツ、鞍、アブリなどの装備です。騎兵隊 vs 平原インディアン諸族の対立は、現実的な脅威でした。ところで、インディアン諸族への馬の移入は、南方からスペイン人入植者を經由して始まり、部族どうしの交易によって、どんどん奥地へと馬が普及していきました。平原インディアン諸族に大きな文化変容がありました。展示の拳銃は、回転式弾倉の連発銃 (6 連発) で、リボルバーと呼ばれます。これらは、軍の制式装備でもあり、小銃と弾丸を共通使用できました。西部劇での「ガンマン」たちの銃でもありました。コルト社製が代表的です。今でも、モデルガンでは、コルト 45 などは人気があるようです。コルト 45 の一種「コルト・ピースメーカー」は、「西部を征服した拳銃」とも言われました。

- ・インディアン諸族の首長たちに贈られた「平和のメダル」と、首長たちの肖像です。ひとつはトマス・ジェファークソン大統領 (在任 1801~1809) によるものです。これら Medal of Peace の、サイズの違いに注目してください。インディアン諸族の内部でのランクの違いに対応しているとされます。

### カウボーイと鉄道、駅馬車

- ・19 世紀後半に、鉄道の路線網が広がってくると、鉄道駅のある町まで、牧畜地帯 (典型的には、テキサス州などの大牧場) から多くの牛を移動させる「カウボーイ」の集団が生まれました。もともと牧場で働いていた人々の中から、カウボーイたちが出て、非常な長距離の、牛の大群 (Texas Longhorn) を移動させるミッションに従事しました。西部開拓時代を象徴するようなイメージのカウボーイたちです。しかし、「カウボーイ」とは、1860 年代から、1880 年代までの、非常に短い期間と、限られた地域での歴史的出来事だったのです。

西部劇映画では、伝説的なカウボーイの人々が描かれています。牛を移動させる旅では、途中に危険も多く、一獲千金的なイメージでも描かれました。多額の成功報酬を、街で使うなどのシーンも映画でおなじみかもしれません。東部と西部とを直結する大陸横断鉄道は、1869年に初めて開通しました。

・開拓農民たちは、大平原地域の草原で、芝土を切り出して、重ねて壁として、住宅を自作しました。木材が、非常に貴重なのが草原地帯でした。住居内部のようすの展示です。質素な最小限の家財道具を、このような小屋に備えて、開拓生活を送りました。幌馬車には、「聖書」が必須の備品として積まれていました。開拓した土地を、事実上の無償で譲渡する法律、南北戦争中に制定された「自営農民法」(Homestead Act)によって、西部への移住熱は、いよいよ高まりました。セントルイスを起点にして、西部各地へ、またロッキー山脈を越えて、幌馬車隊が大挙して西を目指して、隊列を組んで進みました。大西部では、女性の活躍は目覚ましく、ワイオミング準州では、1869年に女性に参政権が与えられました。これは全米で最初でした。

・駅馬車の展示です。駅馬車 (Stagecoach) は、1848年に初めてカリフォルニアに登場しました。やがて西部全域で、路線が広がりました。鉄道が発達するまでの歴史的出来事ではありましたが、「駅馬車」および「幌馬車」(Covered Wagon) は、西部開拓の象徴とされる事物でしょう。西部劇映画でも、両者はシンボリックに登場します。ジョン・ウエイン主演の「駅馬車」(1939) は、クラシック映画です (監督はジョン・フォード)。西部開拓時代の「人間類型」たちが、実にうまく描かれています (個人的な感想)。

・1869年に開通した大陸横断鉄道の建設展示です。ユニオン・パシフィック鉄道 (ネブラスカ州オマハから) とセントラル・パシフィック鉄道 (サンフランシスコから) が接続しました。ワイオミング州を通ります。(私はワイオミング州ララミーに住んでいましたが、この路線は今も現役です。貨物専用)。ララミー砦は、19世紀後半に、インディアンとの交易所を兼ねていました。それから、鉄道建設には、多くの中国人労働者の存在があったこと、犠牲者も多かったことを、忘れてはなりません。

・ミシシッピ川、ミズーリ川など、大河は、交通と物流の大動脈でした。帆船、蒸気船が行きかいました。児童文学の古典『トム・ソーヤーの冒険』(マーク・トウェイン作) は、ミシシッピ川のほとりの町を舞台にしています。最大の物資の交易拠点は、河口に近いルイジアナ州ニューオーリンズでした。フレンチ・クォーターなど、フランス時代の文化が歴史的な地区には残っています。またニューオーリンズはジャズ音楽の発祥地とされる町です。

アメリカ近代という原罪？

・19世紀に描かれた一枚の絵画があります。「アメリカの進歩」というタイトルです。1872年にジョン・ガストが描いたもので、コラージュ風に、アメリカの大地を象徴する草原や山岳を背景に、次のような画題が描かれています。女神の右手に書物と電信線ワイヤー、開拓農民、駅馬車、幌馬車、大陸横断鉄道 (1869年開通)。一同が追っているのが、バッファロ

ーと、インディアンたちです。鉄道や馬車は、西の一方向へ向かいます。先住民を同化し、教化するというイデオロギーに満ちた作品です。

・アメリカ建国と開拓の歴史（光）は、同時に、インディアン諸族が征服された歴史（影）でもありました。また、移民たちによる産業国家、農業大国の建設（光）は、厳しい生活の労働者、開拓農民、庶民たちの苦難の歴史でもあったのです（影）。広範な奴隷制度は、現在も人種問題と、国の分断の「原罪」の部分です（影）。今回の講座題目には、このような気持ちを込めてあります。目覚ましい資本主義経済の伸張と、国家領域の拡大（フロンティア線の消滅）、至るところでの新社会建設、都市と農業の発展、商工業の世界史上も稀に見る急成長は、同時に何ともやるせない影の歴史をも、その本質として含んでいました。このような面は、アメリカに限ったことではなく、地球上の近代といわれる世界の宿命でもあり、現在まで影を落としつつ、紛争と分断の遠因となっています。暗い話になりましたが、しかし人類にとって、世界の近代化が成し遂げた数々の成果も、また事実です。いろいろな立場の言説において、光と影の片方が強調される傾向があるので、確認を兼ねて考えてみました。

歴史の過程は多面的なものであり、偏った見方をしがちな言説の数々に対しては、歴史学という眼を以て、つねに懐疑を持って臨むことの大切さを改めて思います。以上、抽象的ですが、たとえば日々の新聞で、紙面下部のいろいろな出版広告を見るにつけ、感じることで、一部の立場から叱られそうですので、この話題は閉じます。個人的には、歴史学の視点で現在の社会を考えるということは、歴史博物館という施設が有する重要な社会的使命であると考えています。普通はなかなか連想しないような、目の前の現象の背後に存在する歴史的過程、過去の社会での過程を考えることは、私たちの社会のこれからの針路を誤らないためにも、忘れてはなりません。歴史研究に「もし」（If・・・）は無いとは、歴史を学ぶ初めに教えられることです。しかし、現在の社会での選択には、多くの「もし」があり得ます。その針路を後から振り返るためにも、歴史学を詳しく学んでいくことの意義は、強調されてもよいでしょう。

本日も、ご清聴ありがとうございました。（最後までお読みいただき、ありがとうございました）。

（本稿は、館長講座での配布資料に大きく補足したものです。）